
Another one

摩耶 湧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another one

【Zコード】

N63760

【作者名】

摩耶 湧

【あらすじ】

舞台は西暦 一一一四年。

未来の首都「阪都」を舞台に事件はおきた。

そして主人公は 浩 と 伸也。

彼らは普通にどこにでもいる高校生。

普通に恋いをし、普通に遊び、そして普通に好きでもない勉強もある。

そんな彼らの前にある日、女神が舞い降りた。

それと同時に次々を起る事件。

神は何をさせる為に彼らを作り上げたのか。

神は何故、彼らに試練を与えたのか。

”人”は何故、創造されたのか。

彼らの前に”神”は舞い降りた。

プロローグ

漆黒の闇。

全ての”物”と”者”も、”光”も”希望”も、その”闇”の中へと全てが吸い込まれてしまう空間。

一指しの光も届かない”真”の黒。

その空間に身を置いただけで、例えどんなに屈強な肉体を持つた人間も”光”を失ってしまうであろう。

それほど、深く、深く黒い”闇”。

その”闇”の中に一人の幼い少女がいた。

8歳にも満たない少女だ。

全てを失つた”眼”を持ち、”生命”の欠片さえも垣間見る事は出来ない。

それが、あなたには想像できるだらうか？

その少女は”黒”一色の部屋の中、大人4人が座れる程の大きなソファの上で足を抱え座り込んでいた。

一人で。

その”眼”は一筋の光を追い求め、”虚ろ”を彷徨い、少女は微動だにしない…。

少女がこの部屋に閉じこもって四週間が過ぎようとしていた。

最初はたくさんあつたコンビニ弁当もお菓子もジュースも口を違うことに徐々に減つて行き、今あるのは、少女のいる周囲に散らばつていてる部屋にっぱ一の「」。

食料を平らげるたび、少女は何かを失つていった。
危機感、孤独感ばかりが生まれてくる。

そう少女は思いながらも、きっと母が玄関の扉を開け、「ただいま」という言葉と共に自分に笑いかけてくれるだろう…。

いつか帰つて来てくれる…。

その思いだけで一人で過ごしててきた毎日。

母がこの家を出て行つてから三週間で食料は底をついた。
この一週間は蛇口から捻り出す水道水しか口にしていない。
生も根も尽き、絶望感だけが少女を蝕む。

そして、いくつの時間が過ぎたのか、少女の頭に響く声。

少女の意識とは関係なく、その”声”は頭に直接響く。
けれど、少女の意識はその”声”に答える事はなく、以前”虚ろ”に眼差しを向けたまま微動だにしない。

「……た……け……わ……」

少女はピクリともしない。

突如、ガタッといつ音と共に、壁に無秩序に貼り付けられていた意味を持たないカレンダーが床に落ちた。

「わ……し……け……る……」

徐々に近くなる声。

その声は、音に近いほど、言葉では表すことが出来ない声。

少女のボロボロの体はピクシと、そして少しづわめぐ。しかし、以前として、少女の心は、闇に覆われていた。

その“音”は、まつひとつ聞き取れるくらい、少しづつ少女へと近づく。

「私が……けて……る」

少女の“眼”にはそつと、小さな光が宿る。

少女の意識は宙に浮く感触に包まれ、意識の先に一点の光が輝き

だした。

「だ……れ……！？」

少女が発したその小さな声は、誰もいない部屋に空しく響く。少しづつではあるが、少女は意識を取り戻そうとしていた。けれど、四肢が痺れて動かすことは叶わなかつた。

ハツキリと遠のく自分の意識に囚われながら、少女の”部分”は混沌の深海へと沈んでいく。

「わたし…が…た…げる」

朦朧とする意識の中、少女はその声に耳を澄ます。

けれど、彼女の意識は海の深く、深くへと沈んでしまつた。

誰も助け出さないとの出来ない程深い”深海”の世界へと…。

少女は失いそうな意識でその声へと尚も耳を傾けた。

そして、その声をハツキリと聞いた瞬間、少女の意識は消えた。

深い、”海”の中の”闇”へと沈む。

少女はその声に暖かさを感じ、安心し、その声に全てを任せた。

やがて、幾ばくの時間が過ぎ、少女はソファーから立ち上がり、廊下から玄関へと向かつた。

そして、その玄関ドアのノブへと手をかけ、外の世界へと飛び出した。

大空いっぱいの眩い太陽に怯むことなく、無表情のまま少女は歩きだした…。

そして、少女の”意識”は、先ほど聞いた”音”を連呼していた。

「私が助けてあげるわ…」

と、何度も呟く。

それはまるで、神に操られた人形の様に…。

第一話「モノガタリノハジマツ」

天を翔る剣（つるぎのつるぎ）

弧を描き、青い海を泳ぐ一羽の姿。

大空いっぱいの翼を広げ優美に舞う姿。

やがてその大剣は、翼を小さくたたみ地上へと滑空を始めた。コンクリートで出来た、木々をくぐり抜けると弾丸の様にスピードは跳ね上がる。

ある木々の中に降り立つたと思つとすべに上昇を始め、その足には小さい”何か”を掴んでいた。
そして、再び弧を描き羽ばたく。

賢明に生きる”姿”を、まざまざと見せつける、空の王者の姿。

それを見つめる一人の青年の姿。

青年は”強さ”と”生命”を持つ、その王者の姿に憧れの眼差しを向けていた。

「珍しい。あれは鷹…かな？」

彼の名前は 安藤 浩。
あんどう こう。

田の前の王者とは反対に青年の姿は”少年”と呼んだ方が合つて
いるだろ？
背は低く、整った顔には愛くるしさをえたつてくれる。
けれど、その”瞳”だけは、青年の姿を想像させる力強さを誇示
していた。

「ん…。 そつか？ 鷹つてたしか絶滅した筈だぜ？」

彼の名前は 金原 伸也。
かねはら のぶや。

先ほどの浩とは反対に、大人をイメージさせる落ち着き。
そしてスラッシュした体躯は身長の高さと相まって、余計に身長の
高さを際だたせている。
そして、身長の高さと共に手足も長い。
ちょっとした体格の女性でも包み込んでしまう程の手足の長さは
どんな男性諸君も羨ましがるであろう。

そんな全く違う、『コボロ』な二人。

一人が通学する高校への、いつもの朝の日常風景。

「え？ 鷹って絶滅したっけ？」

浩は鷹から伸也に向かって、顔を向け彼を見上げる。

「なんで知らないかな～。 小学校の教科書に載ってる」

伸也はちょっと小馬鹿にしたように浩を見下ろし、右手で顎を触ると皿をつむる。

「うーん！？ 確か95年くらい前に絶滅したぜ」

「え！？ そうだっけ？」

「そそ」

一応、書いておこう。

もちろん、この世界の話で私達の世界では、まだ鷹は絶滅していない。

今から約100程前にある事件がこの世界で起きた。

それは人類史上を搖るがす大事件。

鷹はもちろん、熊やイタチ、そして、猫や犬。

生態系のピラミッドの頂点にいる生命体は絶滅と絶滅の危機に瀕した。
同じ鳥類では生命力が強いカラスさえも絶滅した。

そう教科書には記載されていた。

人類史上を揺るがす地球規模の大惨事。

それは、あるウイルスによつてもたらされたと教科書にはあつた。
どこから発生したかは解らないらしいが、そのウイルスに感染した人は死んでも生き返る。

そして、"生命"を持つものを食らつ。

どいかの映画のゾンビの様な話であるが、事実、約100年前に
そのウイルスは流行つた。

それは人類も例外ではなく、その病魔は人の体を蝕み人々に感染
を繰り返した。

そしてウイルスの発生源はこの日本である。

日本政府は、そのウイルスが世界に拡散する前にある手段をとつ
た。

その策が功を奏しなんとかウイルスの拡散を未然に防ぐ事が出来
たのである。

大多数の日本人の命と引き替えに…。

その大惨事については、又、後述するとしよう。

鷹は絶滅したと教科書には記載されている事は、この世界で事実である。

いつまでも鷹の姿を惜しそうに眺めている浩に、伸やは左手首にはめた時計を見ながら言ってやつた。

「ところで俺達遅刻かも」

伸やは笑いながらいう。

浩は「え？」 といつ言葉も出せないまま、いきなり夢から叫き起こされた。

「やべつ！」

一人は鷹の事は全て忘れて、全力で学校へと疾走する。

「コボコで全く似ていない一人だけれど、どこか似ている一人。

この一人から物語りは始まった 。

教室からの望むことの出来る窓の外には、葉を薄いピンク色に染めた木々が、我こそが一番綺麗と争っている姿があった。走っている時は気がつかなかつたけれど、教室に入れば落ち着くのか、つい窓の外を眺めてしまう。

”少年”浩はホームルーム中にもかかわらず、春の陽気に気をとられてしまい、頬杖を突き、ガラス一枚先にある桜の美しさに惚けた。

壇上では、担任教師が何かを言つてゐるが、心を抜かれてしまつた少年の耳には届かなかつた。

気がつくと、ホームルームは終わり全員が席を立つ。つい、それも忘れて一人だけ座つてゐるところだった。

「おまえ、ボーッとしすぎやー。」

伸也は席を立つと席の横に来て、きつい一言を放つ。

「ああ、ちよつと眠い…」

「またかよ。 昨日早く寝てねーの?」

「そんなことないけど、なんか眠い」「

浩は眠い眼を擦り、両手で頬杖をついて、机の上の端末をこじる。今日の時間割を確認する為だ。

ホーム画面から時間割が表示されるアプリを押す。ズラシと今週分の時間割が画面いっぱいに表示される。今日の予定について、今から三十分後に始業式が始まる。始業式は午前十一時には終了。それが終わればクラス替えの為、三年生の教室へと向かう。浩と伸也は今年から高校三年生。

高校生活最後の年。

来年は大学に進学するか、このまま就職するか。一つに一つの選択肢。

浩と伸やは大学へ進学することに、一応は決めている。今年は受験の年だ。

ちなみに”一応”という言葉は浩の為の言葉。伸也は元々頭がいいので、このまま問題なく進学出来るだらう。けれど、問題は浩のほうにあった。

小学校の頃から勉強が苦手で、まともに机に向かった事がない。

この高校の受験についても、とても合格は出来そうになかったのだが、伸也が毎日、泊まりがけで「地獄の勉強フルコース」を実行してくれたから、なんとか合格する事ができた。

伸也と浩は家が近所同士で親同士が大親友。

自然とはいかなかつたが、二人は友達同士となり、今では”無くてはならない存在”とお互いがなつてしまつた。

今でも浩は思い出す。

高校受験に合格した時の母の顔を。

浩に「よくがんばつた！」ではなく、伸也の手を握つて「ありがとひづー、ノブちゃんのおかげよー」と母は喜んでいた。

このまま、無事に大学受験も合格できればと浩は思つていた。

浩は端末の電源を切ると、ECCチップを端末から抜き取つた。そして、それを自分の腕時計型の端末に差し込んだ。

伸也も浩と同じように端末にECCチップを差し込むと一人は体育馆へと向かつた。

この時代も同じであるが、遙か昔から校長の話は長いと相場は決まつている。

それは、2134年となつた現在も同じである。

五分で話せる事を三十分程をかけて、延々クドクドと話す。

一体いつの時代になつたら、世界から新学期の校長の話が無くなるのであらう。

浩はそんな事を考えながら、終わる事のない話を上の空で聴いていた。

話も終盤に差し掛かり、立つてゐるのも辛くなる頃、背中をつづいてくる人物がいた。

そして、一枚の小さく折りたたまれた紙切れをヒョイと差し出す。

それを受け取る浩は、その手紙の主の顔が頭に浮かんだ。

(ノブか。)

伸也は昔からある物が大好きだった。

鉛筆と紙。

今では、あまり使う事がない代物であるが、彼は日常的に使用している。

この世界では、「端末」という物を全員が左手首につけている。それは浩達の様な学生に限らず、国民全員がその「端末」を手首につけている。

この「端末」が無いと買い物をする事や、身分を証明する事もできないし、友達に電話する事もできない。

この世界のこの国で生活をしようとすると、「端末」は絶対必要なのである。

彼、伸也はこの端末をいつも持つてゐるが、左手首にしてはいな
い。

いつもポケットに入れてある。

そして必要な時だけ、「端末」を取り出す。

彼が愛しているのは、紙と鉛筆であった。

この廻ってきた、「紙」を見て、彼からの手紙だと連想しない人間は、同じクラスには存在しないだろう。

浩は紙を受け取ると、先生達にばれない様に広げ、中身を見る。そこには、「速報！ 本日のクラス替えにて、大事件あり！ どうやら、同じクラスに…」との事だった。

右手でそれを握りつぶし、そつとポケットにしまい込んだ。

校長の話はやっと終わりを告げ、次に新任教師の紹介へとログラムは進んだ。

三人の男女の教師が壇上に上がった瞬間体育館はざわめきだつた。二人の男性教師と一人の女性教師の姿。

女性教師は今時の若い新米教師といった感じ。

これだけの生徒を前にしても決して怯むことなく、堂々と挨拶をしている。

名前を 齋藤 聖子。

身長は高くもなく低くもなく。

何を勘違いしているのか、シャツの胸元のボタンを大きく外し、胸の大きさを強調している。

男性教師の一人は如何にも熱血体育系の様なガツチリした体格。

紙は短髪で腕も太い。

スーツに身を包んでいても、周囲から解るべからず、その下には
厚い筋肉が見え隠れしている。

名前を 近藤 辰夫。

いかにも、強そうな名前である。

そして、もう一人の片割れはまじめな色男といったタイプ。
女性にモテそうなサラサラヘアと高い身長は185?はあるだ
らうか。

伸也と同じか、ちょっと高いか。

名前を後藤 啓介といふ。

最後の後藤教師の挨拶が終わると、校内の女生徒は、なにやらざ
わめきたつ。

浩は当然かといふ思いと、女はああいつ顔に騙されるとか、勝手
に想像していた。

気がつくと、始業式は終わりの言葉を告げ、同時にチャイムの音
が校内に響き渡る。

体育館を出ると、すかさず伸也は浩に声をかけてきた。
腕を掴むなり、グイッと引き寄せ、ヘッドロックの体制になった。

「おまたせ〜。 大事件の事だけど」

「やつさの、女教師の事か？」

「ちが～います。残念！ 知りたい？」

「お前

焦らすやり方は伸也の常套手段だった。
引っ張るだけ引っ張つておいて、結局何も無い事も多々ある。

「又、偽情報じゃ……」

「あのな～確かな情報なのよ。 そんな嘘誰が言った？」

「お前

と最後まで言い終わる事が出来ないまま、誰かに当たった。

「キャッ！」

三人はそのまま倒れ、校内のエントランスのタイル貼りの上に将棋倒しの様な形になる。

「 ごめん！」

誰に当たったかは解らなかつたが、声は女子の声色だったので、浩は急いで立ち上がり、声の主の肩を掴み座り起こした。

その彼女を見て、浩は凍り付いた。

ヒラヒラのウェーブがかかった美しい髪に色白の肌。
睫毛は長く、その容姿はどこかのお姫様の様に光り輝いている。
浩はこの人物を知っていた。

「ごめん！ 大丈夫だった？」

伸也の事なんかそっちのけで、浩は彼女を助けた。
彼女は腕から倒れたらしく、なんとか顔に傷はなかつたが、右腕
の肘から小さな擦り傷が見えた。

「ううん。 大丈夫。 私もよそ見していたから」

澄んだ声色と容姿が合っているなど浩は改めて思った。

「あ… その情報の本人…」

伸也はそういうと頭を搔きながら、そう呟いた。

第二話「不均等」

彼女の名前は樫元 美歩。

透き通る肌と栗色の髪。
まるで、どこの国で職人が精魂込めて作り上げた、人形の様な
容姿と顔立ち。

それが、彼女だった。

「…私こそ…ごめん」

申し訳なさそうに謝る美歩は、右手を口元に当て今にも泣きそう
な表情のまま浩に謝罪した。

「いや！俺の方が悪いから…」

美歩を立ち上がらせると、浩も立ち上がり伸也を見る。

「そうだー 浩が悪い」

「…おまえだろ」

一人のやりとりを聞き、美歩はクスッと笑う。
美歩の元気な姿を見て、一安心する浩。

気がつくと周囲にいた大勢の生徒はかなり減っていた。
早く教室に行かないと、と浩は伸也を急き立てる。

一人が歩き始めたが、美歩はそのまま立ちつくしたまま、その場所にいた。

「あれ？ 教室に行かないの？」

「うん…。私はちょっと職員室に用事があるから」

「そつか。 じゃ！」

浩は残念な気持ちと少し伸也に感謝をした。

彼女の事を好きな男子生徒は多い。

それは先程も説明した通り、彼女はかわいくて大人しい女の子。
そんな彼女の事を嫌いな男子生徒はいるはずがない。
けれど、彼女に決まった男子がいるという噂は聞いた事がなかつた。

その理由を浩は知っていた。

自分達がこれからお世話になる三年生の教室。

その廊下には自分のいくべき教室を探している生徒が大勢いた。

この学校は進級すると、クラス替えがあるのだが、目的の学年教室の廊下にクラス替え表が貼り付けてある。

その表から自分の名前を探し、決められている教室へと向かう。三年生の教室は全部で六クラス。

一クラスの人数は四十人で三年生の生徒数は、二百四十人となる。その人数の中から、自分の名前の一個を搜さなければならないので狭い廊下では、この「じつたがえしの押しきらまんじゅう状態になつてしまふのだ。

「ノブ！ 見つかったか？」

「いんや！ 見つかねー。となりのクラス表だな！」

伸也がそういうと、浩は隣りのクラス表目指して突き進む。浩は背が低い為、自分の現在位置が掴みにくい。周りの生徒が壁になつて先が見えないのだった。だから浩は伸也が進んでいく道を、後ろからついて行く方法をとつた。

そして、隣りのクラス表を見つけると、すかさず、浩は自分の名前を見つけた。

人混みをかき分け、目的の教室へと進む。教室の前のドアが開いているのを確認した。力一杯、その目的地へと向かつた。

ドアをぐぐり抜けると、教室には数人の生徒が既に教室内にはいた。

息荒く、黒板に貼り付けられた座席表で自分の席を確認する。目的の席につき、椅子を引くと伸也が教室に入つてくる姿が目に入つた。

「あつ！ ノブも同じクラスか？」

「そそ」

伸也も浩と同じ工程を繰り返し席へと着く。彼の席は、浩の座つた席のちょうど左側。その間には女子席を挟んで隣り同士であった。

何故か伸也はニヤニヤしながら、浩を見ている。

「なんだ？ 何か顔についてるか？」

「いんや。 なんでも…」

伸也と話をしようと、体の向きを伸也へと向ける。

それと同時に教室の後方のドアが開く音がした。

浩はそちらを見ないで、伸也と向き合つと以外にも伸也の方から

浩へと話かけた。

「いんやー。 うれしいね」

「なにが?」

「なにがつて…。 すぐに解るよ」

「なにをわか
」

突如、浩の視界に何かが立ちはだかり、伸也の姿が消えた。

「え
」

その壁の壁を見上げると、そこにはロングヘアの女生徒の姿があつた。

「なんだ?」

彼女の名前は青井 優。
如何にもきつそうな口調。

その口調通り彼女はシンケンしたイメージが浩にはあった。

彼女は先程の美歩とは無一の大親友。

樺本の「」に青井ありと言われるほど、美歩と彼女ははずつといる。

ちよづど、浩と伸也の関係と同じである。

優は背が高くて美人。

それはこの学校で一、二を争つほど。

美歩と優は宝塚歌劇団の様なイメージでこの校内では通っている。

男優役の優と女優役の美歩。

一人がいれば、絵になるであろう。

「そういうえば、やつを美歩に怪我をさせたそうだな？」

浩はギクリとした。

唐突に本題を持ち込む彼女。

どういえば彼女が怒らないか思案中、そこに伸也は入ってきた。

「いやー、なんだよね。ちょっと二人で遊んでたら、前にいた樺本に気がつかなくて、ぶつかったんだよね。いやー「めん

「そうか。 美歩の怪我も軽かつたからよかつたけど、気をつけ

彼女は伸也と浩のほうを見ず、答えた。

「どうやら、彼女もあまり言いたくなかったようだ。

「『めんな

浩も謝ると、優は何も言わず席へとついた。

そこに、その問題の彼女が教室へと入ってきた。
美歩だ。

彼女は伸也隣りの席へと着くと、「宜しくね」と伸也へ一言挨拶をした。

伸也は嬉しそうに挨拶を交わすと浩のほうへと顔を向ける。

いかにも羨ましいだろと言わんばかりだった。

浩はそんな事も気にせず肘をつき、口で黒板を見つめていた。

「残念だったな。 美歩が隣りじゃなくて

浩は何も言わず、端末の電源を入れた。
ICカードを差し込み、起動させる。

浩は先ほどの手紙の内容を理解した。

伸也は知っていた。

この二人と同じクラスになることを知っていたに違いないと浩は確信した。

浩がそう思うのと同時に教師が入室してきた。

入室してきた教師は担任教師ではなく、先程壇上で演説していた校長先生の姿であった。

体育館での校長先生は遠くてあまり印象は無かったが、こうして間近でみると風格がある。

太ってはいるが太りすぎではなく、丁度年齢通りの体格を携えていふと言つたほうがいいかもしれない。

校長は挨拶をすると、担任の教師の紹介を始める。
入室して来たのは、後藤 啓介の姿だった。

この後藤が高校生活最後の教師となるのである。

「はじめまして！ 先程も挨拶をさせていただきましたが、君達の担当教師となる後藤 啓介です。宜しく！」

黒板に自分の名前を書くと、後藤先生は軽く自己紹介を始めた。

生まれは名古屋。

趣味は読書。

特技は料理。

まさに絵に描いた様なモテる条件を持つ教師。

女子生徒は紹介を始めた担任教師にチャチャを入れる。ほどよく、教室内はにぎやかになった。

そして、校長が退室すると後藤先生は各自生徒の自己紹介を求め、それに答えた。

学校での今田の予定を消化し、下校中にコンビニでお菓子を貰う浩と伸也。

まだ、昼にもなっていないのに豪華盛りの少年達の腹はグウと音を鳴らす。

若人は、食べても食べても沸き上がる無限の食欲に完敗し、今は目の前の食料にありついた。

「やつぱ買ひ食ひはつまいー。」

元気よく宣言をする浩に呆れる伸也。

一人は腹を少しだけ満たし、家路を急ぐ。

ふと、浩は先程の一人の事を思つ。

樺本美歩と青井優。

彼女達はとても綺麗で、少なくとも浩が知つてゐる情報では付き合つてゐる生徒はいない。

その情報がどこまで正確かは解らないが、いりいつ話は聽いた事がない。

彼女達はいつも一緒にいる。

ちょうど、浩と伸也の関係みたいに。

彼らには一緒にいる理由があった。

浩と伸也は小さい頃からの幼なじみ。

浩が五歳の頃、伸也が隣りに引っ越ししてきた。

浩の父親と伸也の父親は古くからの友人同士。

その縁もあって、伸也の父親は安藤家の隣りに引っ越しすることを強く希望したそうだった。

だつたというのは、浩もその事については父親には深く聞いていない。

というのも、伸也に少し問題があつて父親が浩を伸也の友達にしたいという強い思いがあつたそうだ。

一人が親友同士となつてもう、十二年の月日が経つていた。

ピンポーン

インター ホンを押すと家の中から電子音のチャイムが鳴る。
それと同時に浩の母親の甲高い返事が家中で反響する。

二人は玄関を開けるとリズムのいいスリッパの音がパタパタと鳴つた。

「二人とも、お帰り～。お匂い飯出来るわよ」

「おばさま、只今、帰りました」

のんびりとした浩の母親の言葉に、きちんと返事をする伸也。浩は靴も揃えず、返事もせずダイニングへと一直線に向かった。

「「ウチちゃん、ノブちゃんを見習いなさい」

「だつて～ハラペ～だし。今日の匂い飯は何？」

浩は鞄をダイニングテーブルの横に置き、椅子にドカッと腰を降ろす。対する伸也はソファに腰を降ろし、その横に鞄を置いた。

「今田は「ウチちゃんとノブちゃんの好きなカレーよ～。早く手を洗つてらっしゃ～」

母はおつとつと一人に返事をすると鍋を両手に持つてダイニングテーブルに置く。

母の言葉に一人は、はーいと元気よく返事をした。

「今日もおいしそうですね。京子さんのカレーはおいしくから

「あら、ノブちゃんお世辞がつまいわね～。今日のカレーは普通のじゃなくてカツカレーよ～」

伸也は浩の母親の事を「京子さん」と呼ぶ。
もちろん、自分の母親ではないのでお母さんとは呼ばないが、それでも伸也的には精一杯親しみを込めて呼んでいる。
両親の親友とはいえ、他人の子供の世話まで、浩の母親は喜んでしてくれていた。

彼の両親は共働きで、家に毎日いない。

というのも、父親は超有名な建築デザイナーで母親は超有名なインテリアデザイナー。

二人は共に世界各国を飛び回り、家には半年に一回程しか帰っこない。

そんな彼の家庭の事情で伸也は、安藤家に食事と、毎晩のお風呂をお世話になっていた。

これも両親同士が仲がよいおかげである。

そんな彼の家庭事情に浩は「ノブもこの家に住めばいいのに…。わざわざ自分の家に帰らなくても…」と言つてくれていた。

しかし、伸也は他人の家にそこまでお世話になる事に甘えたくなかった。

伸也はしっかり者の男なのだ。

風呂を上がり、バスタオルで頭をグシャグシャと乱暴に乾かす浩。さつそく冷蔵庫を開け、中からお茶を取り出しコップに注ぎ一気に飲み干した。

「やつぱり、風呂上がりの一一杯はうめ~」

「お前はおっさんか?」

伸也はそういうとバスタオルを持ち風呂へと向かった。廊下へ姿が消えたかと思うとヒヨイと再び顔を出し浩を見た。

「あつそつそつ。 今日からフルコースを又始めるから、まだ寝ないよに 」

念押しで浩に伝えると、あーいと返事を空で聞き、伸やは再び風呂へと向かう。

浩はソファに腰を降ろし、テレビの電源を入れた。

ニュース番組では今日の事件や政治について放送している。

西暦2134年になつた今でも殺人や詐欺、強盗は無くならない。何が人の中で、その様な衝動を作り出すのか、それは今になつても研究されている。

過去の人間達は、人を創造する為、色々な研究に人生を賭けて

いつた。

けれど、”人”を作り出すどいりか”アンドロイド”を作り出せてはいない。

過去の文明は今より速い速度で急成長していたと聞く。しかし、ある日を境に人類の成長は鈍化を迎えた。

浩がそう考えた、ちょうどその時、画面に白く無機質で、超巨大な建造物が映し出された。建造物というにはかつこよすぎるが、見た目には”大きな建築物”に見える。

”それは大きな白い壁の固まり”

その巨大な壁は、望遠レンズで遠方から映し出されている為に、巨大な建築物に感じる。

白い大きなコンクリート壁が、何十枚、何百枚と連なり地面に突き刺さっていた。

その”壁”は何かを囲む様に列をなす。

建築物の中央からは、巨大なビル群が何十本と突き出ている光景。

浩は今でも思う。

本当に人類が、この大きな建築物を造り出したのかと。

同じ陸続きの過去の大都市で、何があつたのか浩は知らないが、学校で勉強することや、大人達の口伝えの話では「人が生き返った」という事だけは教えられていた。

そして、今でも死者が蘇り続けていると…。

浩はテレビを消すと、自分の部屋へと帰る。

さつき伸せが言った言葉など、頭の片隅には微塵も残さず布団へと入り込む。

気がつけば、浩の意識はこの世から遠ざかっていた。

紅に染まる空。

夏のジリジリとした暑苦しい空氣ではあるが、麗奈は夏の夕焼けが大好きだった。

大学の研究室で麗奈は、一人研究に没頭しているが、この夕方の一時だけは、この壮大な”絵”について見取れてしまう。

ビーカーやフラスコが所狭しと置かれているが、整理整頓は行き届いていた。

十二畳くらいの大きさの部屋の中には彼女一人しかいない。窓側に置かれた机に開いたノート。

彼女は腰掛けシャープペンシルをクルクルと器用に回しながら景色を眺める。

天気のいい夕方、この”絵”を眺めるのが彼女の習慣になっていた。

カーテンは陽が落ちるまでずっと開けたまま。部屋は朱色に染まり、不思議な色を作り出していた。

ガチャッと部屋のドアが開き、”絵”に見取れていた彼女はビクツとした。

「やあ、まだ居たのかい？」

彼の名前は齊藤 京滋。

三十歳という若さではあるが、教授にまで登り詰めた天才。遺伝子研究の世界で彼を知らない者はいない。

「ええ。なんか夕日が綺麗で…」

「ん。 そうだな」

そう言つて彼は彼女の隣に着き、机に手をつき一緒に夕日を望んだ。

彼は二十六歳の時、人遺伝子の解明されていない残り一十%を解明した。

もつとも解明困難とされる一十%は彼の作り出した公式により、あっさりと解体されたのだった。

そして二十八歳の時、教授なる。

丁度その年、彼女 麗奈は大学院生になった。

「こんな綺麗な景色も、いつかは人間が作り出せるのかしら？」

「人間が、こんな綺麗な世界を作り出せるとは思えないね」

教授として初めて教壇に立つたとき、彼はたくさんの生徒の中から、すぐに彼女を見つけた。

その瞬間、途端に彼女の姿が^{まぶた}臉に焼き付き離れなかつたと京滋はよく麗奈に話していた。

眼鏡をかけ、頬杖を突きながら京滋の講義を聴く麗奈。

只、それだけの姿。

講義が終わるとすぐに、彼女の席へと京滋は向かつた。
彼女は何がなんだかという感じで、気がつけば京滋がすぐ目の前に立つていた。

「… そ う か な。 だ け ど、 い つ か は 作 れ る 様 に な る と い い な」

京滋は気がつくと彼女に告白をしていた。
もちろん、教室内はざわめきたつた。

「そ う だ な…」

彼女の返事はOKの一言。
それ以外には口には出さなかつた。

「い つ か は…」

その日から学部内は、一人の話で持ちきりだつた。
若き天才教授と院生との交際。

そんな事を周囲は黙つてゐる筈がなかつた。

噂は噂を呼び、院生の間だけでなく各教授達にも噂がたつた。

そんな噂に麗奈は只、黙つてゐるしかなかつた。

京滋は彼女の横顔を眺めると急に愛おしくなり、そつとその顔にキスをした。

突然の不意打ちに彼女は面くらい、驚きを隠そつと必死で頭をフル回転させた。

「ん……、そ……だ……ね。あつそつだ今日は先に帰るね」

そういうのが先か、彼女はノート閉じ、鞄にしまつとイソイソと研究室の扉へと向かう。

「昨日寝てなんだから、今日は早く寝なよ」

京滋はそう声を掛けると、彼女は黙つて顎を部屋を出た。

昨日は研究室で泊まり込みで一人研究結果をまとめていた。
一ヶ月後に控えている論文の提出期限が迫つてゐる為だつた。

麗奈は研究室を出ると、扉にもたれ掛けたりフウーと一息つく。心臓が飛び出できそうな早さで脈打つのがわかる。急ぎ足で校舎を出ると、外の空気に触れ少しばら落ち着いた。

京滋はいつも突然にキスをする。

麗奈自信、それは嫌いではないが…。
場所を考えてほしいと考え込む。
研究室に一人きりだとわかつてはいるが、公衆の場での行為に対して、麗奈は少し嫌悪感を感じた。

論文の事などすっかり忘れて、その事ばかりが気になる。
こんな事件で動搖することに、麗奈は少し腹立たしさを感じ、キヤンパスを少し歩く事にした。

およそ三歩……。

たつた三歩進んだだけだが、ある一人の人物が目に止まつた。

目の前に本を持った、人物が通りかかった。

辞典のような本を、両手で顔まで数センチで当たるという距離まで近づけて凝視する院生。

よっぽど集中しているのであらう、フラフラと蛇行しながらこちらに向かってくるかと思つと、あせつてのほうに進んだりもある。

麗奈は危ないなど、心で呪文の様に言葉を唱え、その人物に悟そ
うと行方を見送った。

案の定、”本を凝視する人物”は校内の一 角にある立ち木に衝突
した。

ウツ という呻き声と共に、分厚い本のドサツ という音が周囲に響
いた。

周囲に他の院生はいないので、自分だけが目撃した突然の事故。
麗奈は急いで、その男の元に駆け寄る。

本を拾いあげると、男の隣りに置きその肩へと手を当てる。

「大丈夫ですか？」

「イタア 」

この時初めて麗奈は気が付いた。

”本を凝視する人物”は男性であり、外人だという事を。

エメラルドグリーンの瞳に白い肌。

髪はアジア人特有の黒髪に少し金色が入っていた。
とても、分厚い本を読みあさる男には見えない。
よくてナンパ好きなハーフ外人といったところだ。

男は何が起こったのか解らないのか、手の平をおでこに当てる。
その指の間から血が流れ出していた。

「キヤツ！ 本当に大丈夫ですか？ 救急車を呼びましょうか？」

「あ　　いや、たぶん……大丈夫です……」

「だつて血が　　」

「え？」

男は手のひらについた血を見ると、顔面蒼白になり、卒倒しそうになる。

麗奈は迷わず、携帯を取り出し救急車を呼ぼうとするが、男の手で遮られた。

「いや、やつぱり大丈夫です。　大袈裟過ぎました。　すいませ
ん」

「だつて血が　。　それに大袈裟な怪我だし！」

麗奈は鞄からハンカチを取り出すると、男のおでこに当たった。

「ありがとうございます……。　といひで眼鏡見かけませんでし
たか？」

麗奈が周囲を見渡すが、眼鏡らしき物は目に入らなかつた。

「見あたりませ」

そう言おうとした時だった。
自分の下で、何かがパキッと音を立てた。
もしやと思い立ち上ると、そこには無惨な姿になつた眼鏡がある。

「キャッ！ あたしつたら すいません！」

「え… あ。」

「だけど そんな……。 どうしよ」

麗奈は残骸になつた眼鏡を拾い上げオロオロとする。
そして、一つの答案を思いついた。

「そういうば、視力はいくらくす？か

「え…？」

「私、予備の眼鏡を持っているので、眼鏡を弁償するまで、これ使つてください」

そういうと、鞄の中から予備の眼鏡を取り出し、男へと渡す。
朱色の縁の眼鏡をひと通り眺めると男は自分にかけてみる。

「君、視力0・2だから、よかつたよね？」

「え…、そうですが…」

「そつか。僕も0・2だから、よかつた」

「偶然！よかつたわ。新しい眼鏡が作れるまでそれ使ってください。私が弁償しますから」

「いや、そんな悪いよ。よそ見してたのは俺だから…」

「駄目です！壊したのは私だから弁償します！」

「いや…」

そんな譲り合いの応酬。

どちらも引かない、変な譲り合い。

ずっと続くかに見えたエンドレスな闘いは意外な決着を迎えた。

「わかつた。えつと…、僕の名前はレオ。レオ＝エイブリル

そういうと彼は彼女に右手を差し出す。

「あ、わ…私の名前は麗奈。波賀 麗奈といいます」

麗奈もそれに合わせて、レオと握手をする。

「じゃ、眼鏡が完成したら教えてください。 大体いつも図書室にいるか、昼は学食にいるので…」

「…あの、携帯の番号教えて」

連絡を取るには当然か、携帯電話の話をするとレオは少し怪訝な顔をした。

「『』めんなさい。 僕、携帯持つてないんですね」

「そッ！ そつなの！？ 今時そんな人がいるんだ！？」

「ええ。 携帯電話とかあまり好きではないので」

「解りました。 じゃ、昼に学食に行くので、その時に渡します」

それを聞いたレオは頷くとお互いにじやーといつ挨拶を交わし別れた。

これが、二人の初めての出会い。

桜、咲く咲く。

教室から見える校庭の桜はまだ、散る気配は無く、まだまだ若い姿を人々に見せつける。

桜の薄いピンク色の暖かい色は、人に”陽気”を与える。その”陽気”は、ある少年を元気にさせた。誰しもあるだろうか、気持ちがいい季節に気分はどうにでも上昇気流にのる。

そんな時は人に何を言われても気にならない。

「へへ。機嫌が良さそうだな？ 少年よ」

「そうだな。春という季節は人を陽気にさせる」

「ほほう。春の陽気というか…昨日、勉強サボつて早く寝たら元気になつただけだろ？」

伸也が浩に冷たい視線を向ける。

がしかし、この少年の気分は落ちなかつた。

「へつへ~」

そう、何を隠そう、彼らは受験生。

今年は大学を目指して受験戦争になんとしても勝利しなければならない身分だつた。

「だつてさ~。 眠かつたんだもん」

「開き直るなつつーの」

伸也はサラツとさうとサラツと席に着く。

端末の電源を入れると自分のＩＣカードを強引に差し込んだ。途端にキーボードを力チャカチャとタイピングしだすと、浩の端末はピピッピアームが鳴る。

それは目の前にいる伸也からのメールだつた。

浩も自分の端末にＩＣカードを差し込むとメールソフトを立ち上げ、その内容を確認した。

メールには文書ファイルが添付されていてそれをデスクトップに移す。

何かと思いつайлを立ち上げると…。

「げええ~！」「これはッ！」

「フフフッ！ そうだよ！ 君の大嫌いなテストだよッ。 しかも、ノブ君特製のテスト用紙。 もう寝れるとと思うなッ」

浩はその内容に驚愕を覚えた。

テスト問題が二十枚添付されていた。

その多さに浩は卒倒した。

「ほ、勉強するき満々だな？」

突然、浩の後ろから担任の後藤が顔を覗かせる。

「勉強する事はいいことだ。けれど今は授業が始まつとしているので、それは休み時間にでもするんだね」

といつも口を残し、後藤はさつさと教壇へと着く。

浩はノブ特製のテスト用紙を保存し教科書を画面に展開させた。

早速授業が始まった。

伸也は浩に舌をペロリと出す。

頬杖をつきながら授業を聴くが、浩は授業内容は頭に入らなかつた。

放課後。

クラブ活動の為に浩と伸也は部室へと向かった。
校庭の外周沿いに建てられたコンクリートブロック作りの部室。
その部室の周りには野球部の備品が所狭しと置かれている。
といつても一人は野球部ではない。

陸上部の部員だ。

この部室は野球部と陸上部が使用している。
長方形の部室の三分の一位置にカーテンにより間仕切りがされて
いた。

毎年、部員の数でこのカーテンの位置は微妙に移動していた。
大体、どの学校に行つても陸上部より野球部の部員数が多いと
思うが、この学校も例外ではない。
未だかつて、カーテンの間仕切りは三分の一からほとんど動いた
ことはない。

扉を開くと独特の汗くささが鼻につく。
ちなみにこの部室には扉が一応一つついている。
一つは野球部に、一つは陸上部に。
形上では二つの部室になっている。

部室に入ると早速、ユニフォームへと一人は着替えた。

「昨日始業式で、早速、部活動とは俺らも忙しい事で」

「そんな事、言わねーの。 今年で最後だし」

「なんだ、浩、卒業するのが寂しいのか?」

「ううん！？ どうだろ？ 寂しげっちゃ寂しいし、寂しくないと言えば寂しくない」

「どうちだ…」

そんなことを一人が話している内に、後輩達は次々に部室に入り、着替えて校庭へと集合していった。

二人は急いで校庭へと集合した。

この、陸上部の部員数は十一人。

浩を含めた、男子生徒が五人。

残りの六名が女子陸上部員である。

一年生が五人、二年生が三人。

そして、浩達三年生が三人。

三年生で男は浩と伸也の二人だけ。

あと一人は女子である。

この部は比較的、他の部と比べても女子の比率が高かつた。

急いで集合の校庭に出入りする為の会談へと向かつ。

後輩達の並んでいる姿の奥に、今までの顧問とは違つ姿が見えた。

後藤先生だ。

一人が息を切らし集合場所に集まると「おう」と後藤は声をかけ
る。

「今期から担当顧問になつた後藤だ」

「あ、あれ？ 萩田は？」

萩田先生とは、今までの顧問。

「安藤、先生を呼び捨てで呼ぶな…」

浩は慌てて、萩田先生と言い換える。

「まあいい。 萩田先生はバスケ部の顧問になつた。 出産で育児休暇をとつてゐる伊東先生の代わりに。 で俺が陸上部の顧問になつたわけ。 ちなみに俺も学生時代は陸上部だつたし、都合がいいのよ。 あッ！ 先生は一応、インターハイ出場経験者だからな！」

部員一同はええー嘘だーとか口々にクレームを出す。

浩は後藤先生はどこか堅そうな性格のイメージを感じていた。 それは今まで笑つた顔を見たことがなかつたからか、それとも後藤先生から発する堅いオーラか…。

「じゃ、俺と勝負する?」

浩はいきなり申し出をしてみた。

「あ……の、黙むといひだッ！」

それに負けじと、後藤は勝負を受けた。

かくして、二人の勝負は始まったが、その勝負の行方を語らずとも、勝負の行方はわかつていただけるであろう。

第六話「女神と悪魔」

陸上部での練習も半分を過ぎ、時間は十七時を過ぎようとしていた。

季節は春だけれど、陽が落ちようすれば、まだまだ気温は低くなる。

浩は風邪を引かないよう、ジャージを羽織った。

伸也はまだ練習を止めようとしているので、筋部活を少し覗いて、浩は校庭を歩き始めた。

校庭では、大半のスペースを野球部が陣取っているため、浩達陸上部は校庭の外周沿いを練習スペースとして使用している。伸也が野球部のサード側を走っている姿を確認しながら歩くと、校舎脇にある道場から剣道部のかけ声が聞こえてきた。

あの独特のかけ声、「面…胴！ 小手…」である。

浩は正面玄関の扉が開いているのを確認すると、中をそっと覗いた。

道場独特の畳の井草の匂いが鼻につく。

三十畳程のスペースの広さで、浩の左手側に柔道部、右手側に剣道部が陣を取り練習をしている。

そこに青井 優はいた。

試合ではないので、面はつけていない。

本人だとすぐにわかつた。

長い髪を後ろでくくり、一つに束ねている姿は凜々しい。

背筋がピンと伸び、彼女は上段からの打ち込み練習をしていた。優は背が高く細身の姿でありながら、振り下ろし止めた剣先の軌道は全くそれてはいない。

きつと彼女の筋肉は竹刀を振るためだけに鍛えた最小限の筋トレで身についたものであろうか。

ちょうど打ち込みの練習を終え、剣道部員は一列に並び礼をする。優は浩を見つけると声をかけてきた。

「なんだ？」

あまりの挨拶に浩は拍子抜けする。けれど、想定内の事である。

「なんか、かつこいいな」

「そんな事を言いい、わざわざこくへ来たのか？」

ピシャリと軽くあしらわれる。

優のここの言動はいつものこと。

学校内ではよく知られた、優の言動である。

人を寄せ付けないというか、彼女はそんなところがあつた。

「いや、たまたま通りがかつて」

浩は頭をポリポリと搔きながら小さく呟く。

「なら早く出たほうがいい。 その靴でこの神聖な道場に上がり
れるところちらも困る」

「えッ？ あつ」

浩はつい、練習見たさに靴のまま道場に上がり、畳を踏んでいた。

「『』、『』めんッ！」

慌てて靴を脱ぐと、優だけでなく、他の部員にも頭を下げた。

「それに早く帰ったほうがいい。あの野次馬達に囮まれるぞ」

彼女は剣道場にある窓へと指を指す。
そこには人目、彼女の勇士を見ようと男達がガラスに張り付いて
いた。

写真部らしき人物もカメラのシャッターを切っている。

「うわッ！」

「追い払つてもどこからか沸いてくる」

彼女はそう言つて、その窓に向かつて歩き始めると右手には握つている竹刀を片手で振り上げる。

突然、窓枠に向かつて竹刀を振り下ろすと男達は散るように逃げていった。

「大変だな」

「いつもの事だ。……それよりいいのか？」

「なに」

言葉が出るより、優の指が道場の玄関先を指す。
そこには、先程まで練習で走りこんでいた伸也の姿があった。

「へえー。練習サボつてナンパとはやるな浩」

「い、いや……ちょっと剣道部の練習見てたら青井に声かけられて

「…」

「私は声などかけていない」

優がそういうのが先か、彼女は道場奥の更衣室に向かって歩き出す。

「ほほつ。 せつか。 まあいい…なんか喉が乾いたなあ」

「あつ。 ジフ、これは気がききませんで…買つてきますー！」

「よしよし。 ジジで待つてるだい」

浩はそそくさとジュースを買いに購買部横の自動販売機まで走り、した時、優は振り返り一言。

「ふふつ。 お前達は仲がホントにいいな？」

浩と伸やはあっけに取られ、互いに顔を見合つ。

「誰が！」
「誰が！」

互いの言葉も重なる。

「ほりつ。 仲がいい」

浩と伸也は又、お互に顔を見合させ、すぐに顔を背けた。

放課後。

浩と伸也は汗で冷え切ったジャージを脱ぎ、鞄へと押しこむ。校内では「螢の光」が流れ始め、生徒に早く帰宅しろといわんばかりだ。

浩が部室を出ると、伸也は職員室に鍵を返してから追いかけるからー!といつ言葉を残して校舎の中へと消えた。

浩は一人帰るのも寂しいので校門前で伸也を待とうと歩を進める。

校庭の桜は、まだ満開を迎えたばかりで散るには程遠い。植物には命が宿っていると言われるが、まだまだ、生命の火は消えそうにはない。

けれど、もう一週間もすれば桜の花は、しどじと艶やかな舞いを見せてくれるだろう。

それもまた一興だと、どこかの殿様のような考えに没頭し始めた頃、校門前にお姫様を見つけ足は止まつた。

櫻本 美歩である。

「おーーー、まだ帰らないの?」

「うーーーうん」

美歩は俯き氣味に返事をする。

浩は暗くなつた空を見ながら話かけた。

「部活終わつて帰るといつ？ 誰か待つてゐの？」

「うん…。コウを待つてゐるから」

「そつか。 樫本つてなんの部活してたつけ？」

浩は知つていた。

美歩がどの部に所属してゐるのかを。

「えつと…テニス部」

「そだつけ？ テニス部かあ」

話のネタに困りながら、頭をフル回転させる浩。けれど、女の子とあまり話をした事がないので、話題はすぐになくなつた。

こんな時、ノブだつたら色々な話題があるんだろうなと思いつつも時間だけが過ぎていく。

浩は樫本 美歩の事をよく知つていた。

同じクラスには高校三年生になつて初めてだけれど。

樫本は自分の事をよく知らないだつけど、浩は高校の入学式の日から知つていた。

「まだ、寒いから早く帰らないとね……。しかし、ノブの奴遅いなあ」

「安藤クンは金原クンを待つてるの？」

「うん。 あいつ今職員室に部室の鍵を持って行つてるから。 まあ俺は帰つてもいいんだけど、ノブが寂しがるから」

初めて樺本から話でもうえたことで、嬉しさを隠しながら浩は答えた。

「フフッ。 そうだね。 二人は仲がいいもんね」

「あつ！ さつき青井にも同じ事言われた。 そんなに仲がいいかな俺たち？」

「仲いいよ。 他の人がどう思つてるかはわからないけれど、私とユウの間で二人は仲がいいと思つてるよ」

「そりゃなんだ。 えつ？ 俺たちの話なんかするんだ。 どんな話してるの？」

美歩は急に顔が赤くなつて、下を見ながら浩へと背中を向けた。 浩はなんかマズイ事を言つたかな？ と考え込む。 けれど、彼女から返事は返つてこない。

来ない代わりに別のモノが返ってきた。

何かが、浩の頭に物凄い音を立て激突した。

「 つっ！ いつてえ～」

「お前、何をやつてる？ ミホを泣かしてゐんじゃないだろ？ な

「んなわけないだろ？ ～」

青井 優は突然、革製の学生鞄で浩の頭を殴つたのだ。
美歩は一人を見ながらオロオロしている。

「ミホを泣かしたら承知しないぞ」

「泣かしてなんかない。 話してただけ！」

美歩は、まだオロオロしながらポケットからハンカチを出し、浩の頭へと当てた。

「 ミホつー 帰るよー」

「えつー？ う、うん……」

美歩はハンカチを浩に渡したまま、そのまま持つていてとこゝ合図をし足早に歩く優の元へと小走りに急いだ。

「お前何してんの？」

「え？？」

浩が後ろを振り返ると伸也が立っていた。
浩は決して忘れない、彼の口元が少しニヤけていた事を。

第七話「静かなる王」

朝のホームルームも終わり、休憩時間に入った。

浩は眠い眼を擦り机に頭を垂れた。

昨日の夜は「ノブ特製テスト用紙」の続きを売させたままで眠らせてはもらえなかつた。

深夜四時まで浩と伸也は同じ時を同じ部屋で過ごしていた。

浩は眠い眼を擦りながら、自分と同じ時を過ごしたその人物は何故眠たくはなさそうなのかと思案していた。

きっとあいつは寝ななくとも平気な性格だとか、性格は関係ないのだが、全ては睡眠不足の為、彼の正常な思考を奪つていた。

「眠そうだな？」

席を立とうとしていた、美人な隣人は浩を見て思わず聞く。

「ああ……。 昨日勉強していく……」

「べ、勉強！ お前勉強する奴だつたのか？」

「俺が勉強したらおかしいか！？」

いくら眠くても、おかしな返答には返す元気はまだ残っていた。浩は頬杖をつき優を見返すと伸也がすかさず話に入ってくる。

「そそ。おかしいだろ」

「フフッ！」

微かに聞こえる美歩の笑い声に浩は呆れた表情になる。そんなやりとりがいつまで続くのかと浩は嫌気が差したが、そんな和やかな一時は一人の教師の出現によつて終りを告げる。

ガラツと勢い良く開く教室の前扉。

入つて来たのは、落ち武者風に頭のてっぺんが禿げた教頭の姿だった。

「このクラスの青井 優といつ生徒はいるか？」

教室内の生徒の視線は一人へと向けらる。

おずおずと優は右手を拳手し教頭へと顔を向ける。

「ちよつと話があるので、今すぐ職員室に来るよ！」

それだけいと教頭は出ていった。

教室内はざわめくのと同時に何が起こったのかと優へと詰め寄る。当の本人は何がなんだかといつ様子で先ほど、教頭が出ていった扉へと眼を向けていた。

「なんかしたの？」

「いや、何も……」

そうだろうなと浩は感じ、優は立ち上ると、とにかく行つてくるとだけ言い残し教室をあとにした。

次の授業が始まると何事もなく教師は授業を始めた。
きつと、教頭に青井が呼び出されているのを知っているのだろうと浩は思つたが、教師に問う訳にもいかず、端末を立ち上げ黒板に書かれている授業内容を写し始めた。

彼女が教室へと帰つてきたのは、もう昼が終わる頃だつた。

彼女は沈んだ表情のまま無言で席へと着いた。

浩は自分の席へと着き、彼女のほうへと視線を向ける。

何が起こったのかわからないが、彼女が話をしたがらないのだけは伝わってきた。

浩も何も訊かずそのまま端末を起動させると授業開始のベルは校内に響き渡つた。

放課後。

今日の授業は終わり、端末内にあるファイルを整理しようと一人、席に着いたままキーボードを力チャ力チャと叩く。

親友の伸也は「お先！」という言葉を残し教室を出た。

徐々に人の気配が消えていくを感じながら、浩の意識はファイル整理だけに奪われていた。

いつの間にか教室内には自分一人だけ。

もう既に三十分の時間が経過していた。

急いでICカードを抜き取り、自分の腕時計型の端末へと乱暴に挿し込むと席を立つ。

教室をあとにし、階下へと続く階段へと差し掛かると、そこに青

井 優の姿があった。

「安藤。 ちょっと話があるんだが……」

「え！？」

突然、浩を呼び止めると階段に立ちはだかる優。

彼女は背が高い為、一段程下の段板にいるのだが、目線は浩と一色線に並んでいる。

浩は優に何を言われるのか心臓がドキドキと高鳴る。

この状況はひょっとしたら…誰もが経験する告白と言われる状況ではないかと顔を赤くする。

今まで、そんな状況に出会いつ機会がなかつた為、どうしたらいいのか正直わからない。

誰もいない廊下に彼女の言葉ははつきりと聞き取れた。

「あの……。その……」

「え……。何?」

もじもじとしながら、彼女は言いにくそうに下を見ている。
やっぱりそうだと、浩は確信するが言葉が続かない。

しかも、同じクラスになつたばかりで彼女の事はまだあまり知らない。

今まで彼女の事は噂と姿だけで知つていただけで、まだ知り合つたばかりだ。

そんな彼女の告白に、浩は胸が高鳴ると同時に緊張した。

「……そ……の。今晚ちょっと、学校に来てほしい」

「え?」

思いがけない優の言葉に、返事はできないまま浩は彼女の話に耳を傾ける。

「今日の夜、八時半にここに来てくれないか? 一生のお願いだ

「

「え!?」

彼女はそれだけいうと下を向いたまま浩の返事を待つた。
一瞬でも期待した自分に、恥ずかしくなる浩。
告白ではない。

そして、深夜の学校に来てほしいと懇願する彼女。
そんな突拍子もない話に頷く必要もない。
けれど、青井 優の話し方には、何か切迫な状況が伝わってくる。

「なにかあったの？」

一瞬だけ、浩をチラリと覗き眼を伏せる。

彼女は長い美しい髪を右手でサラとかき揚げ一言だけ。

「今はまだ言えない……」

ただ、それだけの言葉。

浩は彼女が夜の学校に来る理由を考えてみるが思いつかない。
けれど、その理由はきっと、さつきの職員室への呼び出しに関係
している事。

それだけはハッキリと理解していた。

そして、何か問題があるのであれば。

「いいけど。 伸也も一緒に行つていい？」

浩の言葉を訊くと、優の表情はぱっと明るくなる。

「構わない」

少し後悔したが、これを断れば優とは一度と会えない……。
そんな気がした。

「それと。理由を言えるなら教えてほしい」

浩はそれが当然だという思いで、少し語氣を強めて話した。

「……。わかった。でも、夜に会った時でもいいか?」

「うん。それは構わない。そして、何をするのかも教えて。
犯罪の片棒は担ぎたくないから」

「フフフ。犯罪ではないから安心して」

浩は彼女の話の内容を聞き、犯罪ではない事に安心した。
そして、優はそれだけ言うと、階下へと急いで降りる。
その姿を見つめながら、一体、夜の学校に来て何をするのだろう
かという疑問が頭から離れない。

そして自分の思い違いな状況に顔が赤くなるのを感じながら部活に行く為、急いで階段を降りた。

月夜に照らされたビルの屋上に男はいた。

男は金色に輝く月を眺めながら物思いにふけっていた。

今まで生きてきて、一体何年、いや何千年、何万年の月日が経過したのだろうかと。

もう記憶にある”昔”の記憶はいつの”時”の記憶かも定かではない。

けれど、”男”の記憶に残る唯一の昔の記憶は彼女の顔。彼へと神から『えられた”人形”は無垢な意思を無邪気にさらけ出す。

記憶と呼べるほど、その形は原型を留めてはいないが、男の中には”彼女”が確かにいた。

彼女の”名前”さえも、もう覚えてはいないが。

男の”心”の中には彼女の姿があった。

ビルの屋上で彼は思う。

きっと彼女も同じ”時”を過ごしている筈だと。

それが”自分”と”彼女”に”神”から『えられた使命だ”といふ

思い。

曖昧な記憶を確かに手繕りよせながら男は”今”も時の中を生きている。

そして”彼女”と出会いとを確信していた。

男は、今日も”人形”を作り上げる。

それが”神から与えられた使命”であると確信していた。

”全ては彼女と自分に神から与えられた使命である”

その思いが彼の意志を、前進へと掲き立てる。

「全ての準備は整つた……」

と一人呟き、屋上から彼は姿を消した。

夜八時。
草木も眠る……という時間にはまだ早い。
浩と伸也は、予定していた時間よりも三十分早く正門前に到着した。

当然の事ながら伸也は浩に、この行動の意味を執拗に訊いてきた。
浩自身も何がなんだかわからない為、曖昧な返答を繰り返した。
けれど、正門前に優がいるという事は間違いないので、それだけ
は伝えた。

そして、もう一言だけ。

彼女に何かがおきた

伸也の顔色はすぐさま変わり、わかつたと一言だけ。

二人は約束時間までに食事と風呂を済ませた。

伸也は今日は帰るフリをし、外で待機。

浩も「今日は疲れたから早く寝る」とだけ両親に伝え、母は何か
言つたが浩の耳には届かなかつた。

そして、黒のジーンズとパーカーに着替えて、ダウンジャケット
に身を包み、部屋の窓から脱走を図る。

夜に部屋から出るのは中学生ぶりだなど浩は考え、雨樋伝えに階
下へと降りた。

音を立てない様に門扉を開けると、青のジーンズに黒いハーフコート姿で白い息を漏らしながら伸也が立っていた。

学校までの道のりに一人の間に会話は無く、ここまで来てしまつていた。

一人は優に何が起きたのかという疑問ばかりが現れ、そして答えのないまま疑問はモヤモヤの薄暗い霧の中へと消える。

夜の学校に一人で向かう勇気がない浩は、安心したのとこれから何が起こるのかという不安が大きくなる。

「で？ ここで待つてれば青井が来るの？」

「 来ると言つてた……」

伸也は呆れ顔で月夜の空を呆然と見つめる。
四月だといつても夜の冷たい空気が肌をさす。
道路から見る校舎は、月夜に照らされ不気味に青白く輝く。
その校舎に”精氣”は無く、まるで死人の様な蒼白の色を浮きだたせる。

幼い頃に怪談話には学校での話がつきものだつた。

浩は”お化け”とか”幽霊”とかが大の苦手でよく耳をふさいで怪談話を訊いていた。

隣を見ると伸也はワクワクしながら、好奇な瞳で話に夢中になつている姿が、浩の脳裏に焼き付いていた。
きっとこいつは幽霊なんて信じてないんだろう？……そんな事ばかり考えていた。

大きくなつた浩は、さすがに幽霊やお化けは信じてはいない。けれど、こうして夜の校舎の中へ足を踏み出そうとすれば、少しは幼少の頃を思い出す。

今現実に”お化け”や”幽霊”は、この世に存在してはいないだが……。

この間テレビで流れていた映像が頭をよぎる。

いや……それはない……。

”あの、存在はあの場所から離れることは出来ない筈だから

”そう念じると浩は少し気が楽になった。

「もう八時半だけと、青井来ないな？ ホントに来る？」

浩は突然の問いに少しビクッとなり、曖昧に頷く。

「……でも、何があつたのかな？」

「ん~？ わかんね。 でもかなり困つた顔だつたんだよな？」

浩は何気に呟くと伸也はそれに答えた。
けれど、浩にも伸也にもその答えは見えてはこなかつた。

それから十分後に彼女は來た。

遠目に見た彼女は少し……というかかなり元気がないのが見てわかる。

そして、彼女は浩と伸也の前に来ると突然頭を下げる。

「…こんな事に付き合わして、ホントにゴメン……」

二人はポカンとお互いの顔を合わせ同時に言葉を放つ。
優はグレー色のキュロットスカートに黒のレギンスに大きめのダウンコートを羽織っていた。

下を向いている彼女の整った顔に、白黒のロングヘアが覆い尽くし、どこか悲しげな表情を映しだす。

「いや……何するかも知らないし……」

優は顔を下に向けたまま、どうしたらいいか困っていた。

「まあ、何をするのかわからないうけど、今に集合して事は校舎に侵入するんじゃねーの？」

優は黙つた頃く。

「そ、そりだよな……。で、」

「事の経緯は、歩きながら話す」

優は浩の言葉を待たず言ひ。

「じゃ、行こうか

伸也の一言と共に、三人は深夜の学校へと侵入を始めた。

第九話「一人の晝」

優の身長は浩よりも高い。

そして、伸也の身長も浩よりも高い。

伸也と優の身長差は僅かではあるが、伸也の方がおよそ五センチほど身長が高い。

浩の身長もそれほど低くはないが、それでもこの二人に比べたら遙かに低く見える。

そんな二人は、校門のゲートを文字通りヒラリと乗り越えた。この二人の足には、きっと見えないスプリングが入っているのであらうかと錯覚する。

浩がゲートを乗り越えると五歩先くらいに優。

その後ろに伸也。

そして伸也の三歩後ろに浩という並びで校内へと降り立つ。

浩の心臓はバクバクと鼓動が高鳴るのが自分でもわかる。

”深夜の学校に侵入している”

このシチュエーションに心踊らない学生はないであろう。

浩は今回の目的も忘れて、ウキウキしているが”奴”の一言でそんな気分も吹き飛んだ。

「で、口でなにするの？」

伸也は優に向かって、もっともな疑問を投げる。

優はダウンジャケットに手を入れたまま、後ろを振り向き、又、前へと向きなおして歩を進める。

「うん……そうだね。まあ歩きながら話す

伸也も納得した様子で優の後ろをついていった。

浩もそれに習って歩き出す。

鍵が閉まっている筈の校舎。

どこから侵入するのかと浩は思案するが、その必要はなかつたようだ。

優は「こいつだと一人に手招きした。

ついて行つた先は校舎裏の一階女子トイレの窓であつた。

優は鍵が掛かっていないのを確認するとゆっくりと障子を動かした。

た。

「放課後に鍵を開けておいた

「準備がいいことだ」

浩は関心が半分、呆れたのが半分。

優を先頭に浩、その次に伸也と順番にトイレへと侵入。

真っ暗な夜の女子トイレは余計に不気味な感触を映しだした。

優はトイレのドアをそつと開けると廊下へと進む。
ダウンジャケットに手を入れたまま、優は浩と伸也に一度振り向くとゆっくりと話を始めた。

「全ての始まりは一年前」「

今から一年前。

高校一年生の入学式。

互いに同じ高校に進もうと一人で頑張ってきた優と 美歩。

二人は幼少の頃から同じ時を過ごしてきた。

気の弱い美歩

勝気な性格の優

全く正反対の性格ではあるが、きっと 天秤が釣り合つ様に、一人のバランスは調整されていた。

意識はしていないが気がつけば、お互いにいつも一緒に時を過ごしてきた。

その始まりはいつからだったかも覚えていない。

けれど、二人は約束通り、同じ高校に入学できた。

二人は嬉しさのあまり涙した。

合格発表の日は、一人で朝まで一緒に過ごした。

それほど、同じ高校に行くことを二人は希望していた。

入学式の日。

その日は朝から雨が降っていた。

昨日の天気予報では、雨は昼頃には止むであろうと、キャスターは二ツ口で微笑み告げたが結局、夜遅くまで止むことはなかつた。

無事入学式を終え帰宅し、二人は美歩の家に集まった。

美歩の家に宿泊する予定だつたからだ。

鞄にギッシリと明日着ていく制服と下着等を詰めて、優は美歩の家にお邪魔した。

共に食事をし、風呂に入り、そして、美歩の部屋で朝までお喋りに花を咲かせようとしていた。

二人は布団に入り、電気を消す。

「あつ！ 学校に忘れ物した……」

唐突に美歩は小さく叫んだ。
真つ暗な部屋にやせしい声が軽やかに響いた。

「な、な、何突然」

「うー、『ゴメンツ！』……学校の理科室に『デジカメ忘れてきた』

「忘れ物かッ。 なんだ事件かと思つた……」

「……事件かも」

「だつてデジカメでしょ？ 明日でいいじゃん。 今日は寝るよ

「い……や だつて、一人の写真が入つてる」

「ゴロンと横を向いた優は、呆れ顔で美歩にいつ。

「デジカメぐらい明日でいいよ。 誰かに盗めたら私が代わりを貰つてあげるから。 今日はもつ寝み寝よ」

「い、いや。 一の間撮った下着姿の写真とか……」

「……」

「ま、まことにね。 たすがに」

「マズイに決まつてー。 今から取りに行くよ。 誰かの手に渡る前にーー。」

優はガバッと起き上ると、すぐさま着替え身支度を整え、美歩と共に夜の学校へと向かった。

第十話「もう一人の侵入者」

「それから二人で、今日と同じ様に深夜の学校へとむかつたんだ」

優はそういうと一階の突き当たりにある階段室から上階へと向かう。

誰もいない校舎に浩と伸也、そして優の足音だけが静かに反響する。

浩はふと伸也の顔を見た。

伸也はいつもの緩んだ顔をしていない。

何故か奇妙な不安に浩は駆られた。

「どうした？」

「ん……？　いや……。なんか顔についてる？」

浩が声をかけると、伸也はいつもの調子でふざけた。
けれど、伸也は真顔に戻ると優に一言。

「青井？ 階段上がつてどこまで行く？」

「四階……。四階の理科準備室に向かつて」

やつと行き先がわかると、知つている場所だけに道のりは短く感じた。

理科準備室の場所は、四階の階段室から渡り廊下を渡つて向かい側にある校舎の一番突き当たりにある教室だ。

一つ手前の理科室の実験器具やら標本やらが置いてある教材の倉庫に今はなつていた。

出来れば、こんな時間に一番行きたくない教室である。そして、この”闇”に一番似合つ教室……。

「げつ！ あんなとこ行くのかよ。いやだな。そんなどこに行つてどいつある？」

「……行けばわかる」

優はそれだけいようと、止めた歩みを始動させた。そして、再び話の続きを語りだした。

優と美歩は、学校へと到着するとゲート乗り越えた。

優はどこから校内へと侵入するかと考えるが思いつかない。やはり明日の朝早くに登校し、デジカメを回収したほうがいいかと思案する。

優の思案はなんのその、突然美歩は正面玄関へと向かうと、両開きの扉に手をかけ、開く方向へと体重をかけると動くはずのない扉は動き出した。

「 え！？」

「ちよ 、ってなんで開いたの？」

扉を開けた本人が一番驚く。

優は美歩に歩み寄ると彼女に一瞥くれ、校舎への一步を踏み出した。

校舎内に漂う、冷たい空気が肌をさす。

こんな事ならもつと着込んでくればよかつたと優は後悔した。

なんとしても早くカメラの回収をおこない帰宅したいと強く願う。四階へと向かう優は無意識に美歩の手を握った。

「……………」

「……………」

美歩は怖くはないのか…？ 美歩は彼女の言葉に少し驚きを隠せないでいた。

そうだった。

彼女はこういつ怖い場所が大好きだった。幼少の頃から”お化け屋敷”に入つては、怖がるのは優だけ。そして「怖い……？」などと、いつも訪ねてくる。

「……怖いに決まってるでしょ」

女一人でこんな場所。

我慢しつつも優は、ここまで来てしまつた以上もう戻れないなどと考えていた。

なんとしてもカメラの回収をしなければと一人は意氣込み歩を進めた。

階段を一步一步、確実に上がつていいく一人。急いで出てきた為懐中電灯を持つてくるのを忘れたことを後悔した。

何事も無いまま、お互に無言のまま理科室の前へと到着した。

「ヒ、といひで、なんでこんなところにいたの」

「う、うる……。入学した記念に校庭の風景を写真撮影しどうと思つて。ちなみに中学生の時も、入学式の日と卒業式の日撮影したよ」

「や、そう……。これからは忘れないでよね」

「ハメン……」

優はゆっくりとドアを開ける。

ガラガラと木製のドアが「」する音を訊きながら扉を開くと夜空に輝く月が教室内を照らす風景を見る。

誰もいないのを確認してから一人は理科室へと入った。

「で、どこに置いたの？」

「……窓側の一一番後ろの机の上……かな？」

教室の入り口から目を凝らし一人は机の上を睨んだ。
けれど、そこには何も見えない。

「……ホントにあそこで置いた？」

「……うん……。 多分、……」

か細い声で小さく美歩を頷いた。

二人でその席の机の上と中を除くは何も無い。
もちろん、椅子の上にもない。

誰かに拾われたか……。

優の脳裏には男子生徒がデジカメを拾つて[写真データを見て、ニヤニヤしている姿が浮かぶ。

イヤだ！イヤだ！イヤだ！と心の中で連呼し顔は青ざめた。

「大丈夫？ ユウちゃん……。 顔色悪いよ？」

そりや、あんたのせいだよと心の中でセリフを吐き、そんな事なによと答えた。

途方に暮れた優は窓の外を見る。

何かが動いた。

やばい！ と自分の中の何かが、最大限のボリュームで警笛を発する。

見えない様に窓の敷居に顔を隠すようにしゃがむと、立つたままの美歩の頭を慌てて下へと押し込んだ。

「イタ～イ……」

「シッ！ 誰か来るー！」

えつー という美歩の声と警笛音は耳鳴りの様に優の中で響く。

校舎内の音へと耳を澄ます優と美歩。

カツカツという革靴の音が廊下に反響する。

尚も静かに耳を済ます優はある事に気がついた。

いつに来る…。

明らかに四階へと歩いていく足音は、少しずつだが音は大きくなっている。

思いすゞしならいが、一応用心はしておかなくてはならない。優は美歩に机の下へと隠れることをさせると、自分も机の下へと身を潜めた。

尚も響く靴音は迷いなく、こちらの方向へ向かっている。手にじんわりと冷や汗をかきながら、優は少し震えた。さつき窓から姿を見られたのか？ いや、そんな事はない筈。不安に駆られた感情は、思考を悪い方向へと誘われる。気をしつかりと持たなければ……。

いざとなつたら自分が美歩を守らなければならない……。近寄つて来たら、体当たりでもしてふらついたところを、教室後ろの清掃ボックスからホウキを取り出し、それを武器に相手と対等に闘えるだろうか？

頭の中でシミュレーションを何度も繰り返す優。

そんな願いも虚しく、謎の侵入者の足音は理科室の扉の前で止まつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6376o/>

Another one

2011年10月6日15時58分発行